

### 第3 問題作成部会の見解

## 日本史 A

### 1 問題作成の方針

試験問題は、高等学校学習指導要領に準拠し、高等学校で使用する教科書を基礎として作成した。今年度も、おおむねこれまでの方針を踏襲して作題した。

- ① 問題数は大問6問とする。第1問は、高等学校学習指導要領に対応して主題学習に即した問題とし、第4問と第5問は、「日本史B」の第5問と第6問と共通問題とした。
- ② 設問数は、前年度までの36問から34問に減らし、受験者の負担を軽くした。主題学習の第1問が3問、幕末維新期の第2問が6問、近現代史の第3～第6問が25問とした。
- ③ 第1問は、「歴史と生活」に関連して、資料の保存という問題を通して、身近な地域社会と政治とのかかわりを考察させる問題とした。
- ④ 政治・対外関係・経済・社会・文化などの各分野から出題し、バランスをとるように心掛けた。文化史については、細かい暗記を要する難度の高い問題にならないよう配慮した。
- ⑤ 文字資料・図版資料・表・グラフを用いて考えさせる問題作成に心掛けた。
- ⑥ リード文と設問との関連性、下線部と設問との関連性に留意した。
- ⑦ 試験時間60分で解答できる問題を作成した。
- ⑧ 年代順配列の問題では、近年は選択肢数が四つであったが六つにした。四つに絞るためには問題内容以外にテクニク的な様々な配慮が必要で、受験者にも問題内容以外のことに気遣いさせる懸念があるため、すべての配列可能性のある六つを並べることにした。併せて、それによって難度が上がらないよう問題レベルに配慮した。

### 2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 主題学習のテーマである「地域社会の変化」に関連した設題である。新教育課程の改善の基本方針で重視されている「体験的な学習」として、高校生が文書館を訪問するという設定で、リード文を作成した。これを通じ、歴史を考えるための資料が我が国でどのように伝来してきたのかを学び、それが地域社会に与えた影響を考えさせることを目指した。出題に当たっては、「日本史A」であることを考慮し、基礎的な学習や一般的な資料の読み取り能力によって解答可能なものとなるように心掛け、前近代に関する設問は中学校レベルの知識で解答できるよう容易なものとした。

問1 文書館に所蔵されている歴史資料の写真を実際に見て、それを読み取ることによって、解答を導き出す問題である。出題内容も「日本史A」の学習範囲であり、正答率は高かった。

問2 前近代から近代にかけての事件と文書保存の関係を示す文をあげ、その年代順を問う問題である。応仁の乱、国学、士族反乱という大きな歴史の流れが理解できれば解答は容易であると思われたが、正答率はやや低かった。

問3 地域における歴史資料保存の動きを、その地域の人物・藩と関連付けた文をあげ、地域

名を答えさせる問題である。いずれも幕末・維新期の政治過程で大きな役割を果たした人物・藩であり、標準的な正答率であった。

第2問 幕末・明治期、西洋文明との出会いに直面した人々はどのように対応したのか、西洋近代文化を導入するに当たってどのような葛藤<sup>かっとう</sup>と、文化融合の試みをしたのか、という視点から基本的な理解を問うことをねらいとした。リード文だけでなく、史料や絵図といった諸資料を用いて解答ができるように工夫した。

Aでは、ペリー来航に対する民衆・幕府の対応について、史料から考察するとともに、幕末政治・外交史の基本的理解を問うた。

問1 ペリー来航に対して人々の多様な反応があったことを史料から気付かせ、幕府が民衆と外国人との接触を回避させようとしたことを確認させる設問である。高い正答率を得た。

問2 ペリー来航に対する幕府の対処として重要な事柄を問う設問である。正答以外は時期がはっきり異なるものを配列した。しかし受験者には近世後期の②③を正答と考えるものもあり、正答率が低いわけではないが比較的難しかったかもしれない。

問3 ペリー来航以後、幕府倒壊までの経過を問う設問である。基本的な歴史事項であるが、正答率は少し低かった。

Bは、明治期の教育における西洋近代文化の導入とそれに対する伝統的価値観との葛藤、更には文化融合への試みという視点から、教育史の基本事項について問い、絵図からの読み取りを通じて当該期の教育への理解を広く問うたものである。

問4 明治期の音楽教育に関する基本的知識を問う設問である。解答は容易で、高い正答率を得た。

問5 絵図からの読み取りと、教科書レベルの基本的な知識を組み合わせる判断させる設問である。解答は容易で、高い正答率を得た。

問6 学制の問題点や民衆の反応について問う設問である。他の歴史事象に関する事柄と弁別できているかについても確認するもので、標準的な正答率を得た。

第3問 明治時代の近隣諸国との外交が、近世とは異なる性格へと変化しながら展開していったことについて、基本的知識を問うことをねらいとした。

リード文Aは、明治初期の外交のうち、日清修好条規及び台湾出兵における中国との関係と、江華島事件・日朝修好条規と甲申事変における朝鮮との関係について問う基本的な問題で、地図を参考にすることで解答が容易になるように工夫した。

問1 台湾出兵と江華島事件について、その内容を示す記述から事件名を想起させ、台湾・江華島の所在地を地図から確認する基礎的設問で、正答率は標準的だった。

問2 台湾出兵が、明治六年政変後に成立した大久保政権の下で行われたことを確認し、併せて明治前期における政治史の基本的な展開過程を問う設問で、高い正答率を得た。

問3 甲申事変の経緯及び影響と、下関条約で最終的に清国と朝鮮の宗属関係が正式に解消されたこと<sup>こと</sup>の理解を問う設問だったが、正答率は標準をやや下回った。

リード文Bは、幕末から明治時代にかけてのロシアとの外交、更にアイヌに対する支配についての基本的知識を問うものである。

問4 日露和親条約、樺太・千島交換条約、ポーツマス条約という段階を踏んで、日露国境の

変遷についての知識を問う設問だったが、正答率はかなり低かった。国境線の変化が理解できていれば解答は容易と思われたが、条約名を明示せず、国境線となった地点と年代を結び付けるのは、難しかったようである。

問5 アイヌに対する明治政府の対応と支配について基本的な理解を問う設問だったが、正答率はやや低かった。

第4問 近代の政治・社会をテーマとして、普通選挙制度や女性の権利拡張問題を中心に、政治・法律・社会運動に関する基礎的知識を問う出題。標準的な問題と考えていたが、正答率は低かった。

問1 普通選挙法に関する極めて基礎的な知識を問う問題。正答率はやや低く、加藤高明と原敬の業績を混同した誤答が、最大の誤答率を示す結果となった。

問2 選挙制度の変遷に関する基礎的問題であったにもかかわらず、正答率が非常に低かった。

問3 男女平等・女権拡張を唱えた女性運動家に関する理解を問う基本的問題。景山（福田）英子と市川房枝を混同した誤答は少なくなかった。

問4 1930～40年代の思想・文化統制に関する問題。宗教弾圧に関する正答率は高かったが、「人民戦線事件」に対する正答率はやや低かった。

第5問 近現代の政治・外交をテーマとし、国内政治・外交・社会に関する基本的な歴史事項を問う問題である。協調外交を行った「幣原喜重郎」を題材に時期を区切って、それぞれリード文を読み答える設問とした。

リード文Aは、幣原の生い立ちから外務次官、駐米大使に至るまでの叙述を用い、当時の政治・外交に関する理解を問う出題である。

問1 大正期の重要事項である「シベリア出兵」、「米騒動」に関する標準的問題。

問2 大正期～昭和初期の外交に関する年代順配列の問題。正答率は低かった。高等学校教科担当教員から、「不戦条約」は教科書の扱いが小さく、選択肢の年代も接近しているので判断するのが難しいという意見が寄せられた。

リード文Bは、幣原が外務大臣として活躍した時期を中心とする叙述を用い、当時の社会・外交に関する理解を問う出題である。

問3 1920年代から1930年代初頭にかけての小作争議の動向に関する統計表を用い、小作争議の内容を問う標準的問題。

問4 「幣原外交」の基本的内容を問う標準的問題。

問5 1920年代後半から1930年代に至る日本軍の国外活動に関する年代順配列の問題。

リード文Cは、第二次世界大戦後の幣原の政治家としての活動に関する叙述を用い、当時の日本の政治・経済に関する理解を問う出題である。

問6 戦後改革の基本的内容を問う標準的問題。

問7 終戦直後の経済政策に関する基本的内容を問う標準的問題だが、正答率はやや低かった。

問8 「講和条約」の内容を問う基本的問題。高い正答率を得た。

第6問 1880年代半ばから1930年代半ばにかけての政治・外交及び社会に関する問題を取り上げ、当該期の政治状況の変化及び変化の社会的背景・要因についての基本的理解がなされているかどうかについて問うことを意図した。

単に歴史的事項を問うような問題ではなく、歴史の流れ、歴史事項の内容についての理解度を測れるような問題となるように設問を工夫した。Aでは1880年代半ばから初期議会期へと至る過程を取り上げた。政府（藩閥勢力）と政党勢力との間が、当初の対立関係から、その後の妥協・提携関係へと移行していく過程及び、両者の関係の変遷が、どのような問題に規定されていたのかについて述べ、その間の基礎的な政治状況について設問した。Bでは1901年の桂太郎内閣成立以降のいわゆる桂園内閣期から、大正政変、山本権兵衛内閣期までを取り上げ、その過程の政治・社会状況に関する基礎的な内容について設問した。Cでは吉野作造の代表的論文「憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず」の一節を引用して、大正デモクラシー期の思想内容や社会のあり方について設問した。ただし全体として正答率は高くなかった。

問1 大日本帝国憲法の基本原則（天皇主権）、政府と議会との対立の画期をなす第4議会の際の内閣（伊藤博文内閣）を問う設問である。解答は容易であった。

問2 明治憲法体制の特色、第1回総選挙の実態（有権者数・政党の性格・民党の支持基盤）について問う設問である。標準的問題であったが正答率は高くなかった。

問3 条約改正交渉の具体的経緯とそれぞれの段階における交渉の焦点について理解しているかどうかを問う基礎的設問である。解答は容易であった。

問4 第1次護憲運動の中心的人物及び大正政変後に政友会を実質与党として成立する内閣の首班について問うた設問である。基礎的設問であるが、正答率はあまり高くなかった。また問う項目を人名だけではなくする工夫が必要であった。

問5 桂園内閣期に実施された政策やその時期に発生した社会的事件について、その時間的順序を問う設問である。日露戦争前後の歴史の流れを理解できているかどうかについて設問した。ただし選択肢の年代が接近していることもあり正答率が低かった。

問6 軍部大臣現役武官制の持つ政治的性格と、時代的位置について理解できているかを問う設問であったが、正答率は低かった。

問7 大正デモクラシー期の社会の動向についての設問である。労働運動・部落解放運動、自由教育、吉野と関連する思想・学説に関して理解しているかどうかについて設問した。自由教育運動の歴史的位罫などが理解されておらず正答率が低かった。

問8 吉野作造の民本主義の内容についての設問である。民本主義がデモクラシーの翻訳でありながら、主権の所在、民本主義に基づく政治の性質が理解されているかを設問した。正答率は高くないが、民本主義の内容を理解させる標準的問題である。

### 3 出題に対する反響・意見についての見解

今年度の「日本史A」の平均点は、46.51点で、昨年度より9.44点下降した。高等学校教科担当教員から、「全体として標準2単位の科目の特性を踏まえ、出題の内容が基礎的・基本的な事項・事柄となるように配慮されていた」と評価されているが、「正確な知識・理解を必要とする問題が数多く出題された」「『日本史B』との共通問題も難易度が高かった」ことが平均点の下降の要因として指摘されている。高等学校での「教育現場での授業実態を踏まえた内容を考慮に入れ問題を作成してほしい」との要望が出されており、この点は十分配慮していきたい。

『世界史的な視野に立った理解』という観点からは、『外交』の出題が昨年の7題から10題と

更に増加した点を評価したい」との評価がされ、「史料・グラフ・地図・図版など多様な資料が取り上げられている点は評価できる」との指摘を受けている。しかし、「単なる図や史料の読み取りではなく、ある事象との関連性など歴史的な見方や考え方を問う作問をぜひともお願いしたい」との要望が出されているので、こうした要望に答えるよう配慮していきたい。

「出題の範囲については、時代別・分野別ともにバランスのとれた出題がなされた」という評価もあり、「出題方法や表現に関しては、年代配列順問題で選択肢が従来の四つから六つに変化した。全体に難易度は上がったが、選択肢からの類推ではなく正確な理解を問うためには必要な措置だと考える」と指摘されている。また、高等学校での「歴史的思考力を育む取組を大切にして、教育現場に与える影響を十分に考慮しながら作問してほしい」との要望が出されている。「問題数が昨年度より2問減少したこと」は「60分の試験問題として適切」との評価を受けていることもあり、今年度の平均点の下降という事態にかんがみ、難化に陥らないより一層の配慮に努めたい。

#### 4 今後の問題作成に当たっての留意点

今年度の「日本史A」の平均点が9.44点下降したことは、厳しく受け止める必要がある。今後、問題作成に当たって以下の点に留意したい。①出題の内容が細かい事項に入らず、基礎的・基本的事項・事柄となるよう一層配慮する。②高等学校の教育現場での授業実態、授業に与える影響を十分考慮した作題に努める。③引き続き時代別・分野別にバランスのとれた出題に努める。④歴史的思考力を育む取組を大切にして、歴史的な見方や考え方を問う問題をより多く出題する工夫をこらす。⑤平均点を上げるためにも作問の仕方をより工夫する。

## 日 本 史 B

### 1 問題作成の方針

試験問題は、高等学校学習指導要領に準拠し、高等学校で使用する教科書を基礎として作成した。今年度も、おおむねこれまでの方針を踏襲して作題した。

- ① 問題数は大問6問とする。第1問は、高等学校学習指導要領に対応して主題学習に即した問題とし、第2問は古代、第3問は中世、第4問は近世とした。第5問と第6問は近現代とし、「日本史A」の第4問と第5問と共通問題とした。
- ② 前年度までの方針を受け継いで、設問数は36問とし、主題学習6問、前近代18問、近現代12問とした。
- ③ 第1問は、「歴史の考察」に即した内容とし、今年度は「イ 歴史の追究」の「(㉔)法制の変化と社会」に関連した出題とした。
- ④ 政治・対外関係・経済・社会・文化などの各分野から出題し、バランスをとるように心掛けた。文化史については、細かい暗記を要する難度の高い問題にならないよう配慮した。
- ⑤ 文字資料・図版資料・表・グラフを用いて考えさせる問題作成に心掛けた。
- ⑥ リード文と設問との関連性、下線部と設問との関連性に留意した。
- ⑦ 試験時間60分で解答できる問題になるよう留意した。
- ⑧ 年代順配列の問題では、近年は選択肢数が四つであったが六つにした。四つに絞るためには問題内容以外にテクニク的な様々な配慮が必要で、受験者にも問題内容以外のことに気遣いさせる懸念があるため、すべての配列可能性のある六つを並べることにした。併せて、それによって難度が上がらないよう問題レベルに配慮した。

### 2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 ①主題学習の一環として、高等学校学習指導要領における「日本列島の地域的差異」・「地域社会の歴史と文化」などの主題のキーワードとなる「地域」の概念をめぐって、行政区の変遷を中心に、古代から現代までの歴史的知識を幅広く問うことをねらいとして作題した。  
②地方政治の変遷に関心を持った高校生の視点から、その作成したレポートの形式をとるリード文を読ませることを通して、日本史における地域の変遷についての基礎的知識がどれだけ理解できているかを問う問題となるように工夫した。

リード文Aは、近年、「地方」がメディアで取り上げられる機会が多いことに注目した高校生が書いたレポートという設定をしたもので、教科書の見返しの地図と併せて、古代から中世を中心に、支配機構や地域に関する基礎的事項を問うために作成した。

問1 古代の辺境支配と七道制に関する基礎的知識を問う。古代国家の地方支配についての総合的な理解があれば解答は容易であり、標準よりやや高い正答率を得た。

問2 律令国家の地方支配に関する基礎的事項についての理解と併せ、「古代の行政区画」の地図の読み取りの能力を問う設問であるが、正答率は5割台前半とやや低く、近江を東海道とする誤文を選択した受験者が約2割いた。この選択肢については、地図が有力なヒントと

なるとの出題意図であったが、単純に知識問題ととらえた受験者が多かったようで、知識とその場で与えられた情報を結び付ける柔軟な思考力を身に付けておくことが望まれる。

問3 古代国家の行政区に組み込まれなかった北海道と沖縄の、その後の歴史的展開を問う基礎的な設問で、高い正答率を得た。

リード文Bは、江戸時代の領国支配についての基礎的知識と、近現代の地方自治制度の変遷に関する重要な歴史的事項を問うために、Aに引き続き、高校生が書いたレポートの形式で作成した。

問4 近世の大名とその歴史的変遷についての設問。大名領国制と幕藩体制の変遷に関する基礎的知識があれば解答は容易であり、標準的よりやや高い正答率を得た。

問5 近代の地方制度整備において重要な意味を持つ三新法についての基礎的知識を問う。郡区町村編成法・府県会規則・地方税規則という三新法の名称さえ覚えていれば解答は容易と想定し、他委員会からは容易すぎるとの指摘もあったにもかかわらず、正答率は3割台半ばと低く、誤答である④を選んだ受験者もほぼ同数いた。難易度のみから見れば、三新法の名称そのものを問うた方が適切であったとも思われるが、受験者の側にも、自らの知識と設問文の内容をその場で結び付ける思考力の定着が望まれる。

問6 府県制・郡制と日本国憲法下の地方自治法を中心に、戦前から戦後にかけての地方自治制度の変遷の基本的知識を問うもので、平易な出題と考えていたが、実際の正答率は約3割で、誤答②を選択した受験者もほぼ同数であった。X・Y正誤という出題形式が難易度を上げたことも考えられるが、特に日本国憲法における現在の地方自治に関するYの正誤を判定できなかった受験者が多かったことは問題で、戦後史に関する学習や、公民的分野の知識と歴史的な分野の知識を総合する学力をより定着させることが望まれる。

第2問 原始から中世初期までの倉庫に関する3点の写真・図とリード文から、ムラ（共同体）のクラから役所（国家）のクラ、有力な民衆（富豪）のクラへとの変遷を読み取り、時代の流れを概観した上で、各時代の特徴を問うことをねらいとして作題した。全体として問題はやや難しかった。

リード文Aでは、水稻耕作を基盤とした弥生時代の社会における集落（共同体）の重要性を踏まえ、時代の特徴や歴史的な段階を問うように作成した。

問1 弥生時代の集落に関する文章の正誤判定を通じて、この時代の集落・社会の特質と、その歴史的な段階を正しく理解しているかを問うことをねらいとした。正答率は高かった。

問2 戦争のあり方を通じて弥生時代の特質を考える問題で、文献史料と考古学的な事象の両面から、基本的な知識・理解を問うことをねらいとした。正答率は標準的であった。

リード文Bでは、中央集権的な国家の成立によって社会の富が国家に集中したことを踏まえ、この時代の民衆支配の内容と特質を理解しているかを問うことをねらいとした。

問3 律令制度による民衆把握の基本である戸籍・計帳制度や、正税出挙による地方財政などの基本的な枠組みを理解しているかを問うことをねらいとした。計帳を毎年作成したか、6年ごとであったのかという問いが、難しい問題とした。

問4 正税出挙などを財源に、国家が地方で進めた事業を年代順に配列することで、その歴史的展開を正しく理解しているかを問うことをねらいとした。正確な理解を問う基本的な問題

であったが、正答率は低かった。

リード文Cでは、農民の階層分化によって社会に新たな階層が台頭したことを踏まえ、その結果生じた国家支配の転換と文化の変容について問うことをねらいとした。

問5 有力農民の台頭などの社会変動が律令制の変質につながったことを踏まえ、10世紀以降における国家支配の転換の内容を理解しているかを問うことをねらいとした。基本的な問題であったが、社会経済史への理解が弱いいためか、受験者にとっては難問となった。

問6 貴族による民衆世界への注目と、都の文化の地方波及という院政期文化の特徴を踏まえ、個々の文化事象について正しく理解しているかを問うことをねらいとした。正答率は標準的であった。

第3問 鎌倉時代の政治史と、戦国後期から江戸前期における南蛮貿易・キリスト教などの対外交渉史に関する基本的事項を出題した。

Aのリード文は、鎌倉期における地頭の出現や、御成敗式目制定を含めた鎌倉幕府政治史に関する問題についての理解を求めた内容である。

問1 鎌倉期における地頭の権限・役割などについて問うものであったが、守護の権限との相違や、新補地頭と本補地頭の相違が難しかったらしく、正答率はほぼ標準的なものであるとは言え、高いものではなかった。

問2 鎌倉初期における幕府政治史に関する基本的出題であったが、正答率は3割台と低かった。しかし、上位層になるほど正答率は上がり、最上位群の正答率は7割を超えていることから、鎌倉時代政治史の理解度を測り得る問題であったと考えている。

問3 御成敗式目が制定された理由について問うたものであり、史料の引用箇所から御成敗式目と判断させ、その内容とともに制定理由となった当時の社会情勢の理解を問うている。歴史的事象の総合的な理解を問う良問との評価を得、また標準的な正答率を得た。

Bのリード文は、戦国後期から江戸前期に至る南蛮貿易・キリスト教及び当時の人々の文化について述べた文章である。

問4 南蛮貿易開始の契機となった漂着したヨーロッパ人の国籍と、日本にキリスト教を伝えた宣教師の来航地を問うたもので、解答も容易であり、正答率も高かった。

問5 キリシタン大名やキリスト教の布教に関与した宣教師たちの動向について問うもので、教科書を勉強している受験者には解答が容易なものであり、標準的な正答率を得た。

問6 南蛮貿易について問う基本的な設問。誤りの選択肢も含めて「外来の文化などとの接触や交流」を意識させる図版を用いており、高等学校学習指導要領を踏まえた良問との評価を受け、解答も容易であり、正答率も高かった。

第4問 近世の社会や経済について取り上げ、幕府の政治構造や身分制社会について理解できているかどうかを試した。設問は、政治と社会・経済のみならず、幅広い分野に及ぶように配慮し、文字史料や絵図史料を掲げて、歴史的思考力を判定できるような出題になるように工夫した。全体として正答率は高かった。

Aでは、リード文で江戸城の城下町としての機能について解説し、幕府の政治制度と都市空間がどのようにかかわりを持っているかを問う設題である。

問1 江戸城下の商業の中心地である日本橋に関する基本的な設問。併せて近世後期に海防の



重要性を説いた「海国兵談」の内容を理解できているかを見るもので、リード文を読めばヒントがあるので、解答は容易に導き出せる。正答率は第4問中で最も高かった。

問2 政治史に関する基礎的設題。近世初期から幕末まで幅広く江戸城に関する出来事にかかわらせながら、基礎的な歴史知識の習得ができているかどうかをねらいとした。正答率は高かった。

問3 江戸の町人地に関連した知識を問う設問。正文選択であり、正確な理解を必要とする。正答率は高く、上位群と下位群では有意差が目立った。

Bでは、リード文で近世中期以降の社会構造の変化について説明し、『北越雪譜』の史料と『尾張名所図会』の挿絵から、18世紀になると農村に商品経済が入り込むことで社会・経済構造が変化し、身分制の中身も流動を見せる。そうした社会・経済構造の変化、及びその変化には地域的な差異があったことを史料や図から読み解かせることを目的とした。

問4 『北越雪譜』の史料を読ませて、織物生産において雇用労働の下での専門化が進みつつある社会構造の変化の一方で、北越の地域では家内労働による縮生産が行われていたという要旨が正しく理解できているかを問うた。史料を丁寧に読めば、解答は容易である。正答率はかなり高かった。

問5 『尾張名所図会』における専門的な織物生産の様子を描いた図を示して、専業体制及び分業体制で織物生産が行われていたことを読み解けるかどうかを問うた。図はいずれの教科書にも掲載され、問屋制家内工業から工場制手工業への発展の状況を解説するために利用されている著名なものであるから、基本的な学習をしていれば解答に悩むことはない。正答率は高かったが、上位群と下位群での有意差が他の設問に比べるとやや不明確だった。

問6 鈴木牧之の生存期間から、江戸時代の文化・宗教にかかわる事項の時期を問う問題。正答率は、第4問の中では最も低かったが、上位群と下位群の正答率の有意差はかなり明確に現れた。

第5問 近代の政治・社会をテーマとして、普通選挙制度や女性の権利拡張問題を中心に、政治・法律・社会運動に関する基礎的知識を問う出題。標準的な問題と考えていたが、正答率はやや低かった。

問1 普通選挙法に関する極めて基礎的な知識を問う問題。高い正答率を得た。

問2 選挙制度の変遷に関する基礎的問題であったにもかかわらず、正答率が非常に低かった。

問3 男女平等・女権拡張を唱えた女性運動家に関する理解を問う基本的問題。高い正答率を得たが、景山（福田）英子と市川房枝を混同した誤答も少なくなかった。

問4 1930～40年代の思想・文化統制に関する問題。宗教弾圧に関する正答率は標準的だったが、「人民戦線事件」に対する正答率はやや低かった。

第6問 近現代の政治・外交をテーマとし、国内政治・外交・社会に関する基本的な歴史事項を問う問題である。協調外交を行った「幣原喜重郎」を題材に時期を区切って、それぞれリード文を読み答える設問とした。

リード文Aは、幣原の生い立ちから外務次官、駐米大使に至るまでの叙述を用い、当時の政治・外交に関する理解を問う出題である。

問1 大正期の重要事項である「シベリア出兵」、「米騒動」に関する標準的問題。

問2 大正期～昭和初期の外交に関する年代順配列の問題。正答率は低かった。高等学校教科担当教員から、「不戦条約」は教科書の扱いが小さく、選択肢の年代も接近しているので判断するのが難しいという意見が寄せられた。

リード文Bは、幣原が外務大臣として活躍した時期を中心とする叙述を用い、当時の社会・外交に関する理解を問う出題である。

問3 1920年代から1930年代初頭にかけての小作争議の動向に関する統計表を用い、小作争議の内容を問う標準的問題。

問4 「幣原外交」の基本的内容を問う標準的問題。

問5 1920年代後半から1930年代に至る日本軍の国外活動に関する年代順配列の問題。

リード文Cは、第二次世界大戦後の幣原の政治家としての活動に関する叙述を用い、当時の日本の政治・経済に関する理解を問う出題である。

問6 戦後改革の基本的内容を問う標準的問題。

問7 終戦直後の経済政策に関する基本的内容を問う標準的問題だが、正答率はやや低かった。

問8 「講和条約」の内容を問う基本的問題。高い正答率を得た。

### 3 出題に対する反響・意見についての見解

今年度の「日本史B」の平均点は、57.94点で、昨年度より6.33点下降した。高等学校教科担当教員から、「時代の流れを把握させることを重視し、各時代・時期の特徴を総合的に考察させることに重きを置いた高等学校教育現場の実態にかんがみれば、政治・外交史を中心とした今年度の出題方針は歓迎すべきことであった」と評価されているが、「語句選択問題の減少、文章の正誤選択問題の増加及び各選択肢の長文化、年代配列問題の6択形式など、設問形式における変更点」が平均点の下降の要因として指摘されている。平均点60点を上回る「標準的」良問作成の要望も出されており、この点は今後も十分配慮していきたい。

年代順配列問題について、今年度復活させた配列のすべてを掲げる選択肢の6択形式は、「年代配列の選択肢を6択形式とし、あいまいな理解のまま正解に至ってしまう可能性を排除しようとしたこと」で「作題部会の問題改善への意欲がうかがわれる出題内容であった」との評価がされており、今後も継続することの要望へも配慮していきたい。

出題の範囲について、「政治史中心の問題構成をとることにより、時代の流れや因果関係の理解を問うたこと」「文章の正誤問題を増加させることで、より正確な理解力、歴史的思考力を評価しようとした姿勢」は指示できると評価されており、歴史的な見方や考え方を問う問題作成に努めていきたい。

「文化史に関する出題はここまで減少させなくてもよかったのではないか」という指摘もあり、これまで文化史の出題への意見を踏まえて対処したものであったが、今後は更に時代別・分野別にもバランスのとれた出題にも心掛けていきたい。

### 4 今後の問題作成に当たっての留意点

今年度の「日本史B」の平均点が60点を下回ったことは、厳しく受け止める必要がある。高等学校教科担当教員からは、「日本史B」の作題に当たっての、「理解力・歴史的思考力を重視する姿

勢がより積極的に見られた」「例年にも増して作題部会の問題改善への意欲がうかがわれる」等の評価を受けており、今後も基本方針を継続することへの賛意が表されている。

問題作成に当たっては、以下の点に留意したい。①「細かな事象や高度な事項・事柄」に入らず、基礎的・基本的事項・事柄となるよう一層配慮する。②高等学校の教育現場での授業実態、授業に与える影響を十分考慮した作題に努める。③引き続き時代別・分野別にバランスのとれた出題に努める。④歴史的思考力を育む取組を大切にして、歴史的な見方や考え方を問う問題をより多く出題する工夫を凝らす。⑤平均点を上げるためにも作問の仕方をより工夫する。